

昭和43年7月1日第3種郵便物認可  
平成15年12月5日発行(毎月5日1回発行)  
第43巻12月号(通巻533号)

# 風土

12



雪 迎

神 蔵 器

底ぬけのみちのく晴や雪迎

註 雪迎は風に飛ぶ蜘蛛の子

鴟高音酒改めの来る頃か

碧祥寺の日向移りに穴惑ひ

日の奥に熊の眼残す栗拾ふ

農じまひ蕙二枚に小豆千す

啄木新婚の家

「雲は天才」しだれ桂に秋の天

四畳半の机一つに杜ほととぎす鶉草

しろがねのたましひ走る芋の露

奥羽山系黒々走る十三夜

大浴場十三夜月手に掬ふ

大慈寺

宰相の十月さくら咲きにけり

甕棺も民具の一つ野菊咲く



# 竹間集

同人作品



冬間近

齊藤 小夜

さま変りしたる能ヶ谷秋寂し  
柿もいで昔語りの姉いもと  
秋うららパイ一片を皿の上  
萩叢の大きく傾ぎ寺の口  
岸壁の端に一つの秋日傘  
葉大のうらのぬけみち男郎花  
コーヒーは目覚めがよろし冬間近

日光晩秋

徳丸 峻二

行く秋や声の数ふるいろは坂  
両生類研究所前末枯るる  
紅葉滝カメラ続きて発光す  
冬近し柚小屋に日の当たり初め  
戦場ヶ原色無き風の吹き抜けて  
民宿に干し物連ね暮の秋  
迦葉山指したる指の林檎摘む

月の道

宮川みね子

犬逝きて庭にふえきし秋の蝶  
病窓に火星と月を祀りたり  
看護婦の手の甲に文字夜の長し  
月の道病院裏を川流れ  
月待つや一行の文詩の香たつ  
月明に大炉の灰の冷めてゆく  
波の白三段かまへ秋つばめ

高きに登り 浜 明史

雲中へ人ら消えゆく花野かな  
鳶なけり山<sup>やまらつきよう</sup>辣<sup>ひめよもぎ</sup>菲の花揺るる  
姫艾ぬた場に残るけもの臭  
千振の花の主張を肯<sup>うべな</sup>へり  
鷹の山別れを待てり道普請  
返り咲く林檎の花や沖生簀  
坂鳥や朝の大謀<sup>おおしぎ</sup>網こ糸荒らぶ

芋の花 浜 福恵

尊氏の母が生地や芋の花  
なだらかに草刈り上げて聖塚  
古墳村赤米の穂の背高に  
風垣を組む青竹の清しさよ  
ちちははの齢の見えて花野みち  
かりがねの風やさくらの返り花  
人は田を遠巻きに住み十三夜

いわし雲 蓮尾あきら

南冥の果よりとどく鱗雲  
戸一枚繰りて秋風くぐり来る  
コスモスや雲が織りなす影の中  
十二橋すこしく変り秋祭  
標高二百日本平に穴まどひ  
怒りては頭三角いぼむしり  
犬二匹飼はれて秋の岡城趾

いわし雲 鈴木とおる

枝豆をとぼしてひとり笑ひかな  
秋彼岸一葉井戸に手を洗ふ  
特大の胡瓜二本の発行所  
芋嵐半僧坊へ息を継ぎ  
葛の花くぐりて藤の木川流れ  
猫じやらしおいてけぼりとなりにけり  
いわし雲妻の埋葬日和かな

みちのく賛歌

—山路 紀子—

不來方城跡や色なき風の吹く  
木の実落つ鉢の割れたる兜岩  
文字踊る賢治の壁書秋あかね  
身に沁むや「修羅の涙は土にふる」  
囲炉裏切る洩民尋常小学校  
童顔の啄木像やとんぼ増ゆ  
小鳥来て啄木の歌口ずさむ  
瑠璃色の北上川や秋深む  
赤松に絡みて蔦の紅葉かな  
道端に小豆を干して誰もゐず

婆さまの尻つく南瓜の蔓たぐり

雁や南部片富士片流れ

南部藩士

秋高し壬生浪吉村貫一郎

凶作や事代主神祀り

白萩やすらりとお米地藏立つ

熊架を探して森に深入りす

里に向く熊の足跡ありにけり

水霜の夜や枕辺におしらさま

猪鍋の火の落ちとつぴんぱらりのふ

みちのくの下屋なき庇冬隣

# 山河集

同人作品



神蔵  
器選

うすうすと山見えてをり花煙草  
十井 三乙

迎火の燃えつくまでを手で囲ふ  
とんばうの考ふるとき目の動く  
売れ残りたる夕顔の転がれり  
蠅螂の吾を見るとき首回す

空堀に風あふれしむ竹の春  
柴田 久子

金メダルジヨギングロード鳥渡る  
小鳥来る風車の羽根の十文字  
仰がるる夫婦木斛色鳥来  
吟行の一団去りし花野かな

九月かな実習畑に声の湧く  
林 裕子

十六夜や真珠筏の黒々と  
CD付き野鳥図鑑や秋さやか

曼珠沙華山廬にふえてをりしかな  
渡り廊下は三十階よ鯛雲

葉鶏頭に一寸づつの日暮かな  
水井千鶴子

新涼や『虚子五百句集』読みはじむ  
水澄むや十六井戸の漲れり  
曳き売りのこぼせし水や野分あと  
母恋へば月のしづくの実紫

夜の闇の深くてからすうりの花  
中村 洋子

指入れて帯を弛める厄日かな  
三寸の子規の地球儀小鳥来る  
参道の奥に白花曼珠沙華  
七曲り七つ曲りて水澄めり



# 風土独語／神蔵 器



とんぼの考ふるとき目の動く

土井三乙

とんぼの目はよく出来ていて、ひとつの目の中に、もつとこまかい、何万という目のはめこまれている。つまり複眼で、それを構成している個眼によって得られた像を寄木細工的に集めて物の形を知るようになっていく。

ところで、とんぼは眼りをとるのであるうか。私の子供の頃、多いのは塩辛とんぼであったが、何といつても憧れていたのはギンヤンマであった。そのギンヤンマは夏から秋と比較的長い期間見られたが、一匹の寿命は五十日から六十日ぐらいいだという。塩辛とんぼはギンヤンマよりはるかに短いはずである。夜間、或いは昼間でも暗い木陰など全く安全と思われる時はぐっすりと眠るのであるう。

昼間とんぼが止まる時は、翅を水平にして止まるが、さらに安心と思つた時は翅を水平から一段下に下げる。しかし、そんな時でも眼だけは警戒を怠らない。

とんぼが生きているということは考えることである。そして考えることが生きていることなのである。「考ふるとき目の動く」、とんぼが生きて生きと活写された。

金メダルジョギングロード鳥渡る

柴田 久子

シドニーのオリンピックの女子マラソンにおいて、日本人としてははじめて高橋尚子が優勝し金メダルを獲得した。その偉業を記念して、尚子が練習に励んだ道、千葉県佐倉市の方に金メダルジョギングロードとして残されている。佐倉城址からは大分離れた静かな田圃が多い道ようであるが、華やかな栄冠をいただくまでの孤独な戦い、汗と涙の沁みこんだ道と思うと胸が一杯になる。「鳥渡る」のはるかな季語が効果を上げている。

十六夜や真珠筏の黒々と

林 裕子

この句の十六夜は動かない。満月はこの夜から少しづつ欠けてゆくわけであるが、肉眼では昨夜の十五夜と殆ど同じである。それでいて十六夜には名月が過ぎたというそこはかとなない淋しさがあり、光にやわらかさが生まれ、透明な中にもこころもち陰影のようなものを感じる。また、名月は身辺的にも来客があったり、来客が無くても月を祀ったりして、心も月に奪われ勝ちである。その点でも十六夜は静かに独り沁々と月の世界の人となることができる。

真珠筏の下に下げられた何万という阿古屋貝の中では、美しい真珠が育っている。十六夜はただ真珠筏をやさしく黒々と照らしている。それ以上何も言うことはない。

葉鶏頭に一寸づつの日暮かな

水井千鶴子

細見綾子の代表句に

鶏頭を三尺離れもの思ふ

綾子

がある。私はこの句の三尺という距離の把握的確さに感動して書いたことがある。三尺より鶏頭に近づけば、鶏頭が存在が大きく、作者の主体性、ものを考えるということが無くなる。また、三尺より離れば作者は自らの考えにとられ勝ちになり、鶏頭が存在は影が薄くなってしまふ。三尺は鶏頭もよく見え、作者の主体性も失われない絶対の距離と評したものである。

掲出句、作者の「一寸づつ」は、葉鶏頭を真っ赤に燃えさせたせている秋の日の釣瓶落しの一寸づつである。鶏頭でもよいが葉鶏頭の方が鶏頭よりも一般的には草丈も高く、鮮紅色の葉も一寸づつ日暮れが迫る感じである。

田終ひや施設に白の寄進あり

工藤ミネ子

施設とあるが、施設にも児童福祉施設として設けられている児童厚生施設、養護施設などがあり、成人を対象とした社会福祉施設、老人福祉施設などがある。

この句の場合は老人福祉施設ではなからうか。秋田も五城目あたりでは、この年の豊稔を神に感謝し、かつ無事に収穫できたことを喜びあい、田植の終わった時の早苗饗よりもいっそう派手に「庭洗い」が行われる。農家の広い土間や庭で稲扱きや脱穀をしていたので「庭洗い」の名がついたのであるが、今日ではコンバインで刈り取りから脱穀まですべて田圃でやってしまうので、昔ながらの「庭洗い」をする農家はなくなつた。

しかし、老人福祉施設に入所しているお年寄りたちは、現役時

代というか、子供のころから稲作に従事し、生涯をお米作りには心血を注ぎ、そして唯一収穫の祝「庭洗い」を楽しみに生きて来た人たちである。「庭洗い」が無くなったからといって、老人たちの楽しみをなくし、淋しい思いをさせるわけにはゆかない。「庭洗い」の至福のご馳走は今年の新米で掲げた餅である。贈られた白は、「庭洗い」の餅を搗くためのもので、正月の餅を掲ぐためのものではない。

初物の林檎のひとつ父の座に

森屋 慶基

慶基さんは森屋けいじさんのご子息。けいじさんは「死ぬなら盆前がいい、すぐに帰って来れるから」と、平成二年八月十一日の早朝、急ぐように旅発ってしまった。

慶基さんは消防官、俳句はお父さんが亡くなってからはじめられた。同時にお父さんの田圃と畑、りんご山を継いだのである。一人三役といったところだが、どの一つをとつても大変なことである。みちのくの俳句会には消防官としてどうしても休めない時以外は欠席はなかつた。

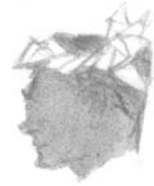
「初物の林檎」はもちろんお父さんから引き継いだりんご山の林檎である。引き継いだ翌年であつたか、消毒に失敗してあらた葉を落してしまつた、などという話も聞いた。あれから十三年、過日「風土」の鍛錬会で銀河高原ホテルの句会では、骨太なしっかりした句を出していた。「けいじさんも喜んでいるであろう」と思いながら帰宅すると、「風土集」の中に

初物の林檎のひとつ父の座に

慶基

があつた。じいんと胸が熱くなつた。

# 風土集



## 神蔵器選

刻合はせ離れて仰ぐ月見かな 東京 林 裕子

帰燕かな空に波打つ雲のなり  
師が住むは我が故郷よ芋の露  
はぐれごころにて深入りす芒原  
村に来て水やすらへり雁渡る

川崎 森屋 慶基

初物の林檎のひとつ父の座に  
注連縄の田を越え張られ秋祭  
蕎麦熟るるこれより先はまたぎ里  
襖入れまたぎ仁右衛門代替はる

山門に一息つきぬ釣舟草

横浜 平田 安生

川底へ照り込む日差し蕎麦の花  
稲刈つて日かげ生るる峡の村  
やや寒し阿波の郷里の山日和  
箸で食ふ三度の飯や秋早  
結界へ人ご糸の湧く曼珠沙華

妻も子もありて独りや百日紅 上尾 保田英太郎

秋茄子のもぎたてをすぐ貰ひけり  
ケーキ屋の灯の明々と九月かな  
水澄みしままに茗荷の泥落とす  
目を上げて見える幸せ渡り鳥

高槻 平田紀美子

羽二重団子下げて芋坂九月かな  
鶏頭を百本育て子規忌かな  
根岸まで糸瓜詣でに来てゐたり  
十六夜の髪乾かしてゐたりけり  
チゴイネルワイゼン秋の七草籠に活け

東京 藤原 キヨ

一匹のあきつの守る子規の句碑  
眞向うに奥羽山脈蟬しぐれ  
秋の蟬命の限り鳴きにけり  
秋まつり稚子幾人か減りにけり